

# 表紙 の 説明

## 熊本城(清正流の高石垣)について



表紙右側は、熊本城内に現存する宇土櫓(やぐら)とそれを支える石垣について、空堀を隔てた箇所から撮影したものです。左側は同様の箇所から地上型レーザスキャナで計測した3次元データから作成した鳥瞰図です。両画像から「扇の勾配」と言われている曲面を持つ高石垣の形態がよく分かります。

### ■表紙画像のご提供先

「熊本城宇土櫓とそれを支える高石垣」

——瀬戸島政博(筆者)

地上型レーザ画像——リーグルジャパン(株)

〒164-0013 東京都中野区弥生町5-11-29 フジビル2F

<http://www.riegl-japan.co.jp> Tel : 03-3382-7340

使用機器 : RIEGL社製 LMS-Z420i

(ステップ角度 縦横0.04°)2箇所で計測

熊本城のある熊本市の京町台地には、中世から戦国時代に千葉城、隈本城がありました。豊臣秀吉の天下統一とともに肥後半国の領主を任された加藤清正は関ヶ原の戦い後に肥後54万石の大守として、茶臼山を中心に7年がかりで熊本城を完成させました。地名も隈本から熊本に改めました。

周囲約5.3kmの城内には、大天守・小天守ほか、49の櫓、18の櫓門、29の城門からなり、本丸御殿は1,570畳の広さであったと言われています。

その加藤家も2代目で改易になり、1632(寛永9)年に豊前小倉の細川家が国替えて入城し、以降11代、240年続き、明治維新を迎えました。

熊本城は1877(明治10)年の西南戦争に際して、西郷軍の猛攻にも耐え、その難攻不落さが証明されました。しかしながら、原因不明の出火により、天守をはじめ多くを焼失し、宇土櫓(図-1)など13基のみが焼失を免れました。

熊本城の特色は、何と言っても高石垣にあります。一般的に高石垣とは高さ11間から25間まで(1間は約1.8m)の石垣を指しています(『石垣秘伝之書』)。熊本城内では、下方が緩やか、上方には反りのある“武者返し”(清正流石垣)のある高石垣を随所で見ることができます。

図-1は宇土櫓とそれを支える高石垣です。空堀内の人の背丈か

ら、この高石垣の巨大さが分かります。図-2は新旧の高石垣が比較できる“二様の石垣”です。カーブの緩やかな加藤清正の時代のもの(右)と、後から追加した細川時代初期とみられる石垣(左)との違いがよく分かります。

図-3は本丸跡に建つ1960(昭和35)年に外観を当時の姿に復元した鉄筋コンクリート造りの大天守・小天守です。大天守は三層六階、地下一階で石垣の上から約29.5mの高さがあります。小天守は二層四階、地下一階で同じく高さは約19mあります。大天守の一階裾は石垣上に丸太を突き出しているのが特徴です。本丸から南側の飯田丸に至る間には図-4のような入りくんだ石垣が見られます。進めば石垣、曲がれば石垣で、防御機能を高めています。

以上のように、今なお残る高石垣の規模や城域の広さから熊本城が日本三大名城に数えられる所以がよく分かります。熊本城は、加藤清正が築いたまさに“石垣の要塞”そのものです。なお、2008(平成20)年



図-1 宇土櫓と高石垣



図-2 二様の石垣



図-3 外観が復元された大天守と小天守



図-4 入りくんだ石垣群

に本丸御殿大広間が復元され、新たな観光スポットになっています。(瀬戸島政博)